

日本計量生物学会

ニュース・レター No.66

1999年1月

目次

巻頭言

会長から一言

1999年日本計量生物学会・応用統計学会合同年次大会のお知らせ

IBC2000招待セッションのテーマ募集

日本学術会議の報告

第6回計量生物セミナーの報告

IBC98報告

1998年第4回理事会議事要旨

1998年第5回理事会議事要旨

1999-2000年度理事当選人による連絡会議議事要旨

その他のお知らせ

高木廣文（統計数理研究所）

インターネットは便利である、などと言うと、「何を当たり前のことを」といわれそうであるが、実感だからしかたがない。実は、2年前まではそうは思っていなかった。友人がいち早くホームページなどを作っているのを見ても、何と暇なことかと思っていたのだから、先見の明がないことはなほだしといえるだろう。1年半ほど前、突然、これからはインターネット上のホームページこそが、情報発信、収集、かつ教育に最も優れたメディアになると悟った。そこで、思い立ったが吉日で、早速八重洲のブックセンターに行き、ホームページの作成のための本を2冊ほど買い込んだ。ひと月ほどかけて、個人的な情報と今まで書いてきた簡単な統計学の解説が読めるようにした。このとき気づいたのであるが、日本の中には意外と統計学の解説が掲載されているサイトが少ないということであった。群馬大学の青木繁伸先生のホームページが他を圧倒しているといつてよかろう。これは優れたもので、統計学の解説のみならず、ホームページ上で基礎的なものから多変量解析の手法まで、いろいろな統計計算ができる。優れたものを見ると真似をしたくなる性分であり、また統計計算のためのプログラム言語に興味を引かれた。

これまで、初心者のためのプログラム教育にBASICを使用していた多くの教育機関では、WINDOWSに対応できずに困っていた

のではないだろうか。BASICといっても、Visual BASICは全く別世界の生き物といえる。この救世主の役割を、JavaScriptが果たせるのではないかと、私には考えられた。1年ほど他のソフトの開発に掛かり切りになっていたので、思いは募るのだがちっとも実行できなかったが、やっと暇になったので、また八重洲まで行き、こんどはJavaScriptの本を3冊買って来た。以前出版したBASICでかかれたプログラムについて、本にしたがって書き直してみると、意外と変換は簡単であった。実際にやってみて分かったことは、ネットスケープとインターネットエクスプローラーでは、動作が異なるという厄介な問題があった。この辺りは、マイクロソフト社が歩み寄ることで、そのうち問題は解決するのではと思うが、いまのところ不便である。しかし、便利な点はもっと多い。インターネットはオンラインで使うものであるが、ブラウザはオフラインでも使用できる。インターネットからダウンロードしてきたプログラムを、必要に応じて修正し、自分のデータにあった仕様にできる。授業などでもホームページの簡単な書き方さえ知っていれば、そこにプログラムを書き加えるのは、極めて容易である。

ネットワーク社会が始まったばかりで、何かと思うようにはいかないが、2千年紀での統計教育はインターネットがキーワードだと確信している。

インターネットで統計計算と教育を

会長から一言

1999～2000年度会長

吉村 功

1月11日の理事会で、引き続いてもう一期会長を務めるようにと言われ、引き受けることにしました。

続けるに当たってまず感じたことは、過去2年間は、理事の皆さんに仕事をまかせっきりで、積極的に自分のすべきことを考えなかったなあということです。学会としての年中行事を進めるだけだったように思います。その結果、もっと発展して良いはずの学会が、会誌もなかなか出ない、特に原著論文が登場しない、といったことに成ったように思います。学会員のためには質の悪い会長でした。申し訳ありません。

もう一期仕事をするようになって反省をしているというのは、次期にはその繰り返しをしたくないということです。そこで今期なすべき活動を考えてみました。

第一は計量生物学の今後の課題をもう少し意識的に発掘すること、その成果を社会に認めてもらう努力をすることです。たとえば健康の問題を考えると、現在の計量生物学会での研究あるいはその結果の普及は、病気を中心にしている傾向があります。それをもう少し広く、環境のあり方や社会の高齢化という側面で捉え、そこでの問題について計量生物学が寄与できるかどうか考えるべきだと思います。生物学自体がデータを分子生物学的レベルで理解しようとしている時代ですから、計量生物学もそのレベルの認識に寄与できるものであるべきではないか、といったことも感じています。

第二は、国際的な寄与を追求することです。たとえば国際計量生物学会に対してわれわれは、発展途上国のためにお金を出す、といったこと程度しか寄与していません。もう少し、世界的な規模で計量生物学の発展を考え、組織活動を担うべきでしょうし、国際会議の組織化も考えるべきでしょう。東アジアの研究者との交流も追求すべきです。短期間でできることはありませんが、方向性は追求したいと思います。とにかく、前期より

は積極的に会の運営を進めたいと思います。無能な会長で申し訳ありませんが、理事の皆さんと会員の皆さんのご協力をお願いします。

話は別ですが、4月から事務局を「統計情報開発センター」（通称、シンフォニカ,sinfonica）に移します。いろいろな事務は同センター（応用統計学会が事務局をおいているところです。）の人に年間55万円（週一日の割）でお願いします。それに伴って、会員の皆さんにお願いがあります。各種の事務連絡はE-mailまたはFaxで行って下さい。E-mailであれば担当理事への連絡が、転送という簡単な手続でできますし、Faxならば週一日の割で事務処理ができます。番号等は次のニューステーターでお知らせします。電話で口頭の問い合わせをすることはしないで下さい。別記事の理事会議事要旨にもあるように、理事会自体もメール中心で行うことにします。この方が経費節約になるのです。

以上です。どうぞよろしく。

1999年日本計量生物学会・応用統計学会合同年次大会のお知らせ

1. 期日：1999年5月6日（木）、7日（金）

2. 会場：総評会館

（〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台3-2-11;
JR「御茶ノ水」駅下車徒歩7分）

3. 参加費：正会員3,000円、非会員5,000円、
学生（会員、非会員とも）1,000円

4.1 特別講演

○竹内啓（明治学院大学）

「統計解析におけるランダム化の問題」（仮題）

4.2 特別セッション

○テーマ：ダイオキシン類のリスク評価

○オーガナイザー：丹後俊郎（国立公衆衛生院）、柴田義貞（長崎大学）

○講演（演者・演題は変更の可能性がありますが。）

・森田昌敏（国立環境研究所）

「測定に関する諸問題---精度・施設間差・許容基準---

・遠山千春（国立環境研究所）

「ヒトと実験動物におけるダイオキシンの
毒性とメカニズム」

・内山巖雄（国立公衆衛生院）

「ごみ焼却施設周辺の曝露評価とその方法
--埼玉県所沢市のごみ焼却施設周辺--」

・丹後俊郎（国立公衆衛生院）

「ごみ焼却施設周辺の曝露評価とその方法
--茨城県龍ヶ崎市新利根町ごみ焼却施設周
辺--」

・渡辺 昌（東京農業大学）

「これまでの疫学研究によって示唆されて
いる健康影響とその評価方法」

5. 一般講演

(1) 申込み方法：

官製葉書に、氏名、所属、演題、代表連絡先
（郵便番号、住所、氏名、
電話番号、電子メールアドレス）を記入し、
下記宛てにお送りください。

〒107-0062

東京都港区南青山6-3-9大和ビル2F

（財）統計情報研究開発センター

応用統計学会事務局内

プログラム編成作業委員会

FAX：03-5467-0484

(2) 申し込み締切（必着）：1999年3月5日（金）

(3) 予稿原稿締切（必着）：1999年4月2日（金）

講演申込者には「原稿作成の手引き」をお
送りします。

原稿枚数は4または6枚です（偶数枚でお
願います）。

6. その他

国際計量生物学会では各支部が開催した年会の
講演アブストラクト（英文）を、国際計量生物学
会のホームページに掲載しています。今回の合同
年次大会における計量生物関連の講演につしまし
ては、昨年までと同様、日本計量生物学会の会員
でなくても、講演者の希望により国際計量生物学
会ホームページに英文アブストラクトを掲載する
ことができます。

IBC2000 招待セッションのテーマ募集

佐藤俊哉

新しい千年紀が始まろうとしています。2000年
7月2日～7日にサンフランシスコで開催される
次なる国際計量生物学会議に今こそ参加を計画す
るときです。ただいまプログラム委員会では、招
待セッションのトピックとオーガナイザーの候補
を募集しています。下に挙げたプログラム委員会
のメンバーは、喜んで招待セッションについての
あなたのアイデアを発展させるお手伝いをいたし
ます。

特別セッションの正式な提案はプログラム委員
会委員長Sylvia Recharadsonにe-mailで送ってくだ
さい（アドレスは後述します）。提案には、セッ
ションのタイトルと概要、オーガナイザーの名前
と連絡先（できればFAXとe-mailアドレスも）、
演題名または個々の演題のトピック、演者の候補
（もし招待セッションとして承認された場合、参
加できることを確認済みであれば助かります）、
が必要です。

招待セッションへの提案の締め切りは1999年4
月30日です。招待セッションの最終的な決定は
1999年6月30日までにプログラム委員会が行いま
す。

IBC2000プログラム委員会

委員長Sylvia Richardson

INSERM Unit 170

e-mail：richardson@vjf.inserm.fr

以上はBiometric Bulletin 2月号に掲載予定記
事の訳です。Bulletinが日本に届くのは時間がか
かるので、委員長の許可を得て掲載しました。
もしIBC2000の招待セッションに何かアイデア
のある方は、日本支部のプログラム委員、佐藤
俊哉（〒106-8569 統計数理研究所、e-mail：
shun@ism.ac.jp）に連絡してください。

日本学術会議の報告

1998年10月31日

第4部会員，統計学研究連絡委員会委員長

吉村 功

[統計研連]

第17期第4回の研連を9月14日に開きました。今回は「統計科学におけるパラダイムの転換」に焦点を絞って，自由討論を行いました。統計科学といった場合，それを規定する方法論は何か，そもそも方法論として独自性，固有性が確立し得るものか，従来からのモデル論の枠組みで現実求められているデータ解析の課題が解決できるものか，などなどです。

学問というものは生きている限り変化します。それを少数の人間が規定しようとするなど不可能です。研連で議論をしたいのはそういうことではなく，現実動いており変化している枠組みが，非統計家（及び統計教育に従事している人）に正しく意識されていないのではないか，それが統計学の有効利用や今後の統計学を支える統計家の養成を阻んでいるのではないか，これについて統計学関連の研究者・教育者の間で議論をする機会を設けた方がよいのではないか，ということです。

委員会では，来年春にシンポジウムを開こうということになりましたが，具体的な日時や，どなたに問題提起をお願いするかについては，各学会の都合や予算の関係を含めて委員長と幹事で原案を作ることになっています。いずれ皆さんにお知らせしますので，この催しへの積極的な参加をお願いします。

[学術会議]

10月27日～30日に，総会と各委員会，部会が開かれました。10月26日に出された「21世紀の大学像と今後の改革方策について」という答申を巡る議論，国立研究機関の独立法人化を巡って「国立研究機関のあり方について」という見解を發表しようという議論，「情報研究の中核的研究機関準備調査委員会（中間報告）」を巡る議論，研連の再編を巡る議論等が行われました。答申や報告に

ついていうと，報告作成に参加している人がいる一方で，その影響を一方的に受けそうな人もいますので，全体としてははっきりした見解を出すのはけっこう難しいことです。最終的には，「，，，」を行うときには，「，，，，」を十分考慮して「，，，，」という総論的なことを「言葉を選んで」結論とする，あるいはしようとする，ことになりそうです。なお，国立情報学研究所の準備委員会には，統計数理研究所の北川源四郎教授が専門委員として参加されています。

いろんな議論のなかで，私にとって印象的だったのは，第2常置委員会（学問の・思想の自由並びに科学者の倫理と社会的責任及び地位の向上に関すること）で，「政府と産業界に，大学の現状に対するいらだちが満ちている。これは日本だけのことでなく，ヨーロッパでも（日本より強く）現れている。大学の内部からその危機感に対応する動きがないことが，たとえば学長権限を強めよという答申に現れているのだ」という解説が，答申作成に関与した委員から述べられたことでした。大学，とりわけ国立大学の人は，そういうことを意識して答申を読むべきでしょう。もし国立大学の教官が答申に無関心ということになったら，それこそまさに，「いらだちを増殖する」ことになりそうです。

第6回計量生物セミナー（臨床の部）の報告

セミナー担当事務局

佐々木 秀雄（旭化成工業）

第6回計量生物セミナー臨床の部は「ICH-E9ガイドライン－臨床試験のための統計的原則－を巡って」と題し，10月16日午後及び17日午前に，静岡県裾野市の富士教育研修所にて開催された。製薬企業を中心に，大学，研究機関，規制当局等から109名と多数の参加者を得て，活発な討議が交わされた。

本ガイドラインは，ICH（International Conference on Harmonization）で議論されてきた，臨床試験に関する統計的原則をまとめた日米欧三極共通のガイドラインである（本ガイドラインは，既に厚生省から昨年11月に通知されてい

る)。セミナーではガイドライン策定に携わった専門家会議のメンバーによる議論の紹介、製薬企業内の統計家の解釈と問題提起、アカデミアの統計家の見解、全体の討論という形式で議論を行った。

プログラムを以下に示す。

オーガナイザー 大橋靖雄（東京大学）

10月16日（金） 司会：大橋靖雄（東京大学）

1) 検定における有意水準、有効性の証明について

- 1-1 各種の試験における有意水準，
- 1-2 検証的試験は一つで良いのか
吉村功（東京理科大学），上坂浩之（日本イーライリリー）
- 1-3 Bridging Studyを含めた考え方
魚井徹（山之内製薬）

2) エンドポイントについて

- 2-1 評価指標の問題点
楠正（日本薬剤疫学研究会）
- 2-2 評価指標に求められる信頼性の評価と確保－事例－
島崎茂樹（三菱化学）

3) 施設を取り巻く課題

- 3-1 施設をどう定義するか
佐藤俊哉（統計数理研究所）
- 3-2 施設－薬剤交互作用の解析の意義と解釈
森川敏彦（武田薬品工業）
- 3-3 検証的試験における施設数
椿広計（筑波大学）

10月17日（土） 司会：上坂浩之（日本イーライリリー）

4) 症例検討会はなくなるのか？

- 4-1 症例，データの取り扱いに関するプロトコルへの記載
山口行治（ファイザー製薬）
- 4-2 盲検下再検討と解析計画書
高橋行雄（日本ロシュ）

5) 試験統計家のqualification

- 5-1 試験統計家の要件，教育プログラム
大橋靖雄（東京大学）
- 5-2 認定は必要か，認定の方法

吉村功（東京理科大学），魚井徹（山之内製薬）

総合討論

「1）検定における有意水準、有効性の証明について」のテーマでは、吉村氏からは、日本のガイドラインとして施行される際に、優越性試験試験の有意水準は片側2.5%（差の信頼区間は両側95%）、非劣性仮説の試験についても同じ扱いにすることとなった経緯が説明された。用量反応関係を検討する試験では、傾向性の検定結果は臨床用量の優越性の証明にはならないと述べられた。また、検証的試験の数については、品質の良い試験で科学的証拠を見いだすこと、一般性を確認することの両面からの考察が必要であることが強調された。上坂氏は、ICHの観点からは有意水準に関しても国際調和が必要であること、用量反応関係の試験から特定の用量の有効性を主張する場合にはFEWを2.5%以下にすべきこと、非劣性試験の場合は非劣性の許容限界と試験の証拠能力に厳密さが必要となると述べられた。検証的試験の数に関しては、一つの試験でも十分である条件として、1）主張する効能について十分な証拠能力がある、2）一般化可能性を示しうる、3）結果の安定性を示しうる、ことが必要であると述べられた。講演後の議論では、第二相で用量反応性の確認を行う場合や、用量を選ぶための検証前の段階では、2.5%の水準にとらわれる必要はないとの意見があった。また、今後は、有効性の証拠の提示として海外の臨床試験の結果を利用しうる事、有意水準と検証試験の数は切り離して扱うべき事などが議論された。魚井氏からは、「推定が両側5%だから有意水準は片側2.5%」という論理は適切ではないとの指摘があった。海外データの利用に際しては、間接的証明という証拠能力の低下という問題があることが指摘された。また、今後の開発計画は有効性の証拠も国内と海外をまとめて考えていくべきであると述べられた。引き続き議論では、国際共同試験における各国別の試験の条件は未だ整理されていない事、有効性・安全性・用法用量の問題は必ずしも同様に扱う必要がない事などが指摘された。

「2）エンドポイントについて」では、楠氏は、従来日本で用いられてきた一例毎の有用性評価は

必ずしも必要でない事、類薬の評価方法を踏襲してきた事の問題を指摘された。その上で、有効性、安全性ともに、今後は総合評価変数よりむしろ合成変数の使用を試みるべきであろうと提言された。また、統計的に妥当性を確認する方法を整理された上で、今後は新薬開発計画の中での評価変数の信頼性、妥当性の研究の重要性を強調された。島崎氏は信頼性研究の経験事例を二点発表された。小児の多動性評価尺度の例では、病院のプレイルームで、医師、臨床心理士、保母、母親等が同時評価した事例が紹介された。病院では観察できない行動の評価の問題点が指摘された。また、脳血管障害の精神症状評価尺度については、患者のビデオを観察に代えて信頼性研究を行った事例が報告された。また、信頼性研究の留意点として、重症度と改善度のいずれを評価するかの明確化が重要である事、一企業での研究は困難である事を指摘した。議論では、信頼性研究は、信頼性が認められたという結果に留まらず、問題点の抽出と改善の提案がなされるべきである事が指摘された。また、従来型の安全性評価としての”概括安全度”の問題点も指摘された。

「3）施設を取り巻く課題」では、佐藤氏は、欧米ではセンターあたりの症例数が多いが、実際は単一の施設＝センターではなく、複数の施設をまとめたセンターという概念があることを紹介された。その上で、施設あたりの症例数が少ないから施設をまとめるのではなく、偏りを最小にし精度を最大にするという統計的原則の重要性を強調された。さらに、同一の品質管理プログラム下にある施設はまとめることが可能で、それは必要条件であろうと提案された。森川氏は、交互作用が示唆されないときは分散を最小にする統計量が良く（TypeII推定値）、交互作用が示唆されるときは施設に対する恣意的重み付けを避けるために施設の単純平均（TypeIII推定値）が良いだろうと述べられた。また、施設－薬剤間交互作用解析は、試験の結論の頑健性を確認する意味で重要であり、少なくとも施設のくくり方をプロトコルに一つは規定する事が必要であろうと述べられた。椿氏は、まず、科学的実験に対して再現性を考える実験計画の重要性を主張された。ISO5725の考え方を紹介され、施設間再現性を保証するためには、

施設数の設定が重要であると指摘された。また、ガイドラインは科学的精密性を求めすぎていると指摘し、第3相試験においては、日常診療を再現するような工夫が必要であると主張された。施設の例数を増やした試験の交互作用解析は、薬の特徴よりも施設の精度管理を目的とすると論じられた。議論では、施設を含む解析では、母数模型か変量模型かは固定的に考えるのではなく、状況に応じて解析上のアプローチを考えるべきという指摘があった。また、施設－薬剤交互作用が見いだされた後はその原因となっている予後因子の施設間の偏りの検討が重要である事、一般化のためには施設数の増加よりも多様な患者を増やすことが必要との議論があった。

「4）症例検討会はなくなるのか？」のテーマにおいては、山口氏からは、プロトコルに症例・データの取り扱いを規定するメリットとして、事後的決定を回避できる点、例外処理が少なくなる点等が指摘された。さらに、盲検下レビューで検討する内容もプロトコルに記載すべきである事が指摘された。また、海外における症例検討会の事例が紹介された。今後は、症例検討会を実施する際には、症例・データの取り扱いと評価の検討を明確に区別すべきと強調された。高橋氏は、今後は、盲検下レビューを踏まえた社内検討と、医学的判断を伴う効果判定委員会とに、機能を分化する必要性を主張された。症例・データの取り扱いにおける治験依頼者の責任を強調された。さらに、社内手順に従った解析計画書を作成することの重要性を指摘し、事例を紹介された。議論では、症例取り扱いの事前規定は試験結果の適用範囲にも関連する事、盲検下レビュー以前の検討はデータモニタリングの範疇に入る事等の追加指摘があった。また、症例の選択条件、治療違反、合併症等の判断は、社内の医学専門家に移管可能であろうが、そのための訓練が必要であるとされた。さらに、臨床検査値の異常値のグレードにおいては、NCIのCommon Toxicity Criteriaのような基準の運用が必要であるが、一方で正常値の適切な設定も重要な事が指摘された。

「5）試験統計家のqualification」では、大橋氏は、まず統計教育プログラムの必要性を述べられた。また、試験統計家の認定・資格化には、プ

ロトコルや解析報告書に実務者として名前を書けるレベル、プロトコルにサインできる責任者レベルの二段階が必要であろうと述べられた。さらに、東京大学における生物統計教育、及び企業人を対象とした生物統計の社会人教育の事例が紹介された。吉村氏は、認定が実力を反映できるかが重要であり、そのためには質の良い認定制度が必要である事を述べられた。しかし、認定すべき組織の確立が困難であるとも指摘された。また、認定制度の前に倫理綱領の議論が必要でないかと提案された。魚井氏は、承認申請の立場から考えると、資格よりも資料の正しさが本質である事をまず指摘した上で、認定・資格化は、統計家レベルの底上げや、チャレンジ目標としての意味があると述べられた。その上で、認定・資格化には、試験責務と要件の定義、教育・訓練の体系整備、目標水準の複数設定、制度の経過措置が必要であると指摘された。引き続き議論では、試験統計家は統計だけでなく医学的知識を身につける必要がある事、また臨床家とともにチームワークができる事等の重要性が話題となった。しかしながら、両方を共に教育できる講座はほとんど存在しないため、複数の学部や講座が連携して教育機会を提供する事の必要性が指摘された。

総合討論では、開発計画の策定においても試験統計家が役割を果たすべき事、評価変数の反応性の確認は時には開発計画外で実施すべき事、海外の試験データを利用する際の留意点、等に議論が及んだ。

IBC98 参加報告

宮崎大学 藤井良宜

昨年12月13～18日に南アフリカ共和国のケープタウンで行われたIBC98に参加してきました。初めての国際学会ということで、出発前の準備の段階からハラハラドキドキの連続でしたが、終わってみると充実した1週間を送ることができた気がしています。ただ、私の乏しい英語力ではわからないことがいっぱいですので、この報告を書くのは無理だとお断りしたのですが、「会長の吉村先生が最初にあった会員に報告してもらおう」という

編集方針ということですので、私なりの参加報告をさせていただきます。

ケープタウンは、関西空港から約19時間かけて南アフリカ共和国のヨハネスブルグに飛び、そこで国内線に乗り換え、約2時間のところにあります。その間の待ち時間を考えるとほぼ丸1日かかることになります。そのため、今回は日本からの参加者は少なかったようで、わたしも何人かの人から「今回は遠いから参加しない」という話を聞きました。しかし、実際に行ってみるとすごくいいところでした。南半球ですので、夏だったのですが、最高気温は26℃前後で、暑いと感じるほどではなく、半袖でいると時々寒く感じるほどでした。町の様子は、かなり西洋化されており、あまりアフリカらしい野性動物に出会うことはできませんが、英語が使えればほとんど不自由はなく、滞在するのにはいい場所です。

学会の会場は、ケープタウンの町から車で15分ほどのところにあるケープタウン大学のキャンパスの中にありました。会場に行き、受け付けを済ますときにもらったプログラムやアブストラク等が入った手提げ袋には驚きました。この袋は、麻で作られたりっばなもので、そのうえ鳥らしきものの絵とIBC98のロゴまで刺繍されています。この袋は人気があったようで、最終日に残った袋を30ランド(約600円)で販売すると、あっという間に売り切れになっていってしまうほどでした。あとで気付いたのですが、柳川先生や東京理科大の大森君もその購入者のなかに含まれていたようです。また、私の妻も他のお土産よりもこの袋が気に入ったようで、「なぜ、もうひとつ買ってこなかったの」と責められるほどでした。

学会は、間に1日の休みをはさみ2日間ずつ、計4日間行われました。2つの大きな部屋と4つの小さな部屋が準備されており、2つ程度の招待講演のセッションを含めて、4つから6つのセッションが平行して開かれます。私の発表は大会初日の午後に予定されていたので、状況がわからないままに終わってしまったという感じですが、そのお陰で、そのあとはゆっくりと、他の講演を聞くことができました。いろんなテーマの講演が準備されていましたが、私にとっては、3日目のが最も魅力的でした。その理由のひとつは、あの

generalized linear modelで有名なNelder先生の特別セッションです。このセッションは、invitedセッションではないのですが、Nelder先生おひとりだけのセッションで、最近のgeneralized linear modelの話題を2つに分けて30分位ずつ講演されました。講演自体も魅力的でわかりやすかったのですが、先生のお姿もたいへん印象的でした。先生は、貫祿のある体格で、白いお髭、真っ赤のシャツで、季節が季節だけにサンタクロースを連想してしまうほどです。また、発表が始まる前にも、聴衆に対して、「私はこの位置で話をするから見えない人は今のうちに移動してください。」という気配りも忘れない紳士でもありました。

もうひとつの理由は、修士の頃にいくつかの論文を読ませていただいたHougaard先生のお話を聞いたことです。Hougaard先生は、生存時間データにおいてfrailtyを導入してさまざまな関連性のモデルを提案されている先生で、ご存じの方も多いことと思います。結局その後私自身はあまりその分野を詳しく研究することはなかったのですが、この学会ではfrailtyに関連した講演がかなり目につき、この分野がすごく進んでいることを感じさせられました。

もちろん、この他にも経時データの解析や空間データの解析など関連したテーマの講演を一度にまとめて聞くことができ、かなり刺激を受けました。これが国際的な学会の魅力なのだろうと、感じています。

このような講演だけではなく、期間中にはいろいろなイベントが準備されており、私も大会3日目に行われたCivic Receptionだけ参加しました。最初はCivic Receptionで何が行なわれるのかよくわからないまま参加したのですが、市役所の5階にある会場に行くと、軽食と飲みものが準備されており、多くの人がすでにそれらをつまみながら、おしゃべりを楽しんでおりました。わたしもすぐに仲間入りさせてもらい、ある程度お腹も落ち着いてきた頃に、司会者の紹介で一人の女性が前のステージに現れました。その女性が話をはじめると、それまでざわついていた会場が静かになり、みんなステージの近くへと集まり話を聞いていました。話の内容からすると、ケープタウンの

市長さんのようでしたが、アルコールも入っているせいもあり、私にはほんの少ししか理解できませんでした。ただ、吉村先生と柳川先生はその講演にたいへん感激されたようで、スー、ウイルソン会長からお礼として、あの麻袋が手渡された直後に、ステージまで行って市長さんと握手をされていました。あとで吉村先生とお話したときも、まだその余韻が残っており、「あの市長さんは素晴らしい。そんな市長さんと握手できて今日はすごくうれしい。このことはぜひ報告に書いてください」とおっしゃるほどでした。

このあと、この報告でどんな内容を書くかという話題で盛り上がったのですが、そこで吉村先生は、「報告はすべて真実である必要はない。面白くするためには、多少の脚色は必要で2割程度のうそが含まれても構わない。」と主張されました。そんなものかと思っていると、あとから来られた柳川先生もほぼ同じ内容のことを言われ、やはり同じ2割と数字を出されたときには、偶然の一致に私たちは大笑いしてしまいました。さて、皆さんはどのようにお考えでしょうか。残念ながら、私の能力では2割もの脚色はできませんが、この文章で少しでもIBC98の雰囲気が伝わればと思っております。

1998年日本計量生物学会 第4回理事会議事要旨

日 時：1998年9月7日（月）18：15～20：15

場 所：統計数理研究所

出席者：岩崎、上坂、岸野、駒澤、佐々木、佐藤（喬）、佐藤（俊）、高木、椿、林、三中、吉村 各理事
栗原 事務局

1. 前回議事要旨の確認

一部訂正の後前回議事要旨が承認された。

2. 1999年合同年次大会

吉村会長が7月28日に開催した応用統計学会との連絡委員会の報告を行った。1998年合同年次大会出席者は、会員180名、非会員71名、学生26名（合計277名）。

1999年度の会場候補として、5月6日（木）、

7日(金)、総評会館(お茶の水)を仮予約した。2F大会議室は机をいれて270名収容可、4F会議室は50名、使用料は2日間で40万円程度。次回の連絡委員会は11月4日に開催予定であり、特別セッション、特別講演のテーマを議論する。

3. 1999-2000年役員選挙

選挙管理委員は、宮岡悦良会員、金藤浩司会員。

4. 第6回計量生物セミナー

生物の部のプログラムはすべて決定したと報告があった。臨床の部は、ほぼプログラムは決定し、現在一人の演者と交渉中とのこと。本日現在で、生物の部23名、臨床の部88名の申し込みがある。

一日だけ参加を希望する場合参加費はどのようなのか、という問い合わせがあった。今回は参加費から宿泊費1万円を引いた額を連絡したが、今後宿泊を希望しないセミナー参加者の扱いについて議論した。セミナーの趣旨からやはり宿泊して議論することが重要ではあるが、一方でできるだけ多くの人に参加してもらうことも重要である。今後は宿泊する参加者を優先し、宿泊しない参加者は宿泊する参加者を受け付け後会場に余裕がある場合に受け付けることになった。その場合の宿泊しない参加者の参加費は「宿泊費分を減額(現在は1万円引き)」とすることにした。

5. その他

応用統計学会から10月26日、27日に大阪で開催される応用統計シンポジウム「モデル選択」を協賛してほしいという依頼があり、協賛を承認した。

応用統計学会との事務局統合について、現在応用統計学会事務局があるシンフォニカに見積もりを依頼中で、9月中には返事がもらえる予定。今後シンフォニカからの回答を待ち、金額が計量生物学会として納得できるものであれば現在の形でお願いし、支払えない額であればシンフォニカに対し別な提案を行うこととした。

新しい入会案内(案)を作成したので、事務局、理事で検討して、次回の理事会までに意見を出してほしい。

次号ニュース・レターには選挙のため会員名簿を掲載する必要がある。投票締め切りを10月末にするには、10月の早い時期にニュース・レターを発行する。

一昨年の計量生物セミナー生物の部の原稿と合

わせて、計量生物学次号を発行したい。同じく一昨年セミナー臨床の部の原稿は最終段階。雑誌に団体名での投稿があり、編集委員にこれに対する意見を聞いた。少なくとも責任者は明示してほしい、また何らかの形で執筆者全員の氏名を掲載する、という意見が多数であった。理事会としても、団体名の投稿であっても少なくとも責任者、連絡先が明確な形で掲載すべき、という意見であった。

佐藤会計理事から、本部送金は1ドル134.25円で実施できたと報告があった。

IBS本部では、Fellow会員という新しい会員のカテゴリを作り、ケープタウンでのIBS98での承認を目指してFellowの推薦を募っていた。Fellow会員の推薦数が少なく、またその意味についてRegionによって解釈が一定していないことなどからIBS98の評議員会で再度Fellowについて議論することとし、Fellowの認定を凍結している。しかしこの問題は、推薦者、非推薦者に落ち度があるわけではないので、Fellow会員の定義などを議論し明確にすることは支持するが、すでに推薦のあった人についてはFellow認定の作業に入ってほしいという意見を日本支部として送ることにした。

今回は11月9日6時半から統計数理研究所で開催予定。

記録 佐藤俊哉

1998年日本計量生物学会 第5回理事会議事要旨

日時: 1998年11月9日(月) 18:30~20:00

場所: 統計数理研究所

出席者: 鶴飼, 佐々木, 佐藤(俊), 高木, 丹後,
椿, 橋本, 林, 三中, 吉村 各理事
宮岡 選挙管理委員長
栗原 事務局

1. 前回議事要旨の確認

若干の語句の訂正の後、前回議事要旨が承認された。

2. 1999-2000年役員選挙

宮岡悦良選挙管理委員長から資料を用いて説明があった。11月5日に統計数理研究所で金藤浩司

委員とともに開票を行った結果、有効投票数65、無効投票2（消印なし1、差出人記名あり1）、有効記名数が理事195、監事59であった。開票の結果、理事当選者は、上坂浩之、大瀧 慈、大橋靖雄、越智義道、折笠秀樹、岸野洋久、後藤昌司、佐藤俊哉、柴田義貞、丹後俊郎、椿 広計、林邦彦、三輪哲久、柳川 堯、吉村 功の15名、監事当選者は、駒澤 勉、芳賀敏郎の2名。

3. 第6回計量生物セミナー報告

佐々木理事から10月16日、17日に実施したセミナーの報告があった。参加者、臨床の部109名、生物の部34名。収入は参加費、昼食代で3,890,000円、支出は2,278,240円。臨床の部は100名+10ぐらいまでは会場に入れそう。ただし、宿泊は150名だともうきつい。今回は生物の部の参加が少なかったのではとかなった。生物の部参加者は非会員が多いので、最初に会長から挨拶をしてほしかった、という意見があった。今後はセミナープログラムに「会長挨拶」を忘れずに入れる。

セミナー会場富士教育研修所の都合で今後の日程は決まっている。1999年は10月15日（金）、16日（土）、2000年は11月10日（金）、11日（土）。

4. 事務局移転について

10月20日に応用統計学会田中会長、田村会計理事、吉村会長、佐藤（喬）会計理事でシンフォニカを訪問し、シンフォニカ副理事長、総務部長と事務局移転について話した。

5. 1999年合同年次大会特別セッション

ダイオキシンをテーマに丹後理事がオーガナイズすることになった。

6. その他

ニュース・レター10月号にIBC98ツアーの広告（三喜トラベル）を掲載した。柳川理事から、書面にてIBS本部のファイナンス委員会委員に選任されたこと、本部への会費送金方法について、JRとしては旧来の支払方法を支持すると回答したことが報告された。

当選理事による連絡会議を11月27日6時半から統計数理研究所で開催予定。次回理事会は追って連絡する。

記録 佐藤俊哉

1999-2000年日本計量生物学会 理事当選人による連絡会議議事要旨

I. 対面会議

日 時：1998年11月27日（金）18：30～19：30

場 所：統計数理研究所

出席者：上坂、大橋、越智、佐藤、椿、林、吉村
各理事当選人

1. 1999-2000年推薦理事の選出

理事当選人はメールにより候補を推薦した。多数の候補が寄せられ、専門分野、学会での役割などを議論の結果、次の各氏を推薦理事とすることにした。

佐々木秀雄（旭化成）

佐藤喬俊（クインタイルズ）

二宮正士（農業研究センター）

三中信宏（農業環境研究所）

山岡和枝（帝京大学）

理事当選人にはこの結果をメールで報告し、12月4日までに意見を出してもらう。

2. 意見交換

理事の役割分担や来年からの学会活動などについて、希望などを交えた意見交換を行った。

II. メール会議

対面会議の結果を11/30にメールで報告し、議論を行った。

推薦理事を承認するという返事が多数であったが、「本学会の活動や推薦理事が医薬関連に偏りすぎではないか」という意見があった。それに対し、「学会への貢献の実績など選んでもいいのではないか」、「現状の医薬環境の急変と学会の果たすべき役割を考えると医薬に偏ることもやむをえない」という議論があり、吉村会長の判断でこの件についての議論を12月10日まで延長した。

その結果、12月10日までに意見の修正はなく、上記5名の方を推薦理事とし、1999-2000年日本計量生物学会理事20名を決定した。

Ⅲ. 理事会予定

第1回理事会は、1999年1月11日(月)午後6時から、統計数理研究所にて新旧合同理事会として開催する予定。

記録 佐藤俊哉

関連学会等のお知らせ (1999年1月—1999年12月)

- 1999年4月11日 - 14日 Miami Beach, USA
SUGI 24
- 1999年4月25日 - 27日 Manhattan, KS, USA
Conference on Applied Statistics in Agriculture
- 1999年5月5日 - 7日 Ottawa, Canada
16th International Symposium on Combining Data from Different Sources
連絡先: e-mail: thibchr@statcan.ca
- 1999年5月17日 - 21日 Poznan, Poland
11th International Genstat Conference
連絡先: FAX 48 61 8233671
e-mail: pkra@igr.poznan.pl
- 1999年5月19日 - 21日 兵庫大学
第13回日本計算機統計学会
- 1999年7月19日 - 23日 Technical University
Graz, Graz, Austria
14th International Workshop on Statistical Modelling
連絡先: FAX 43 316 873 6977
e-mail: friedl@stat.tu-graz.ac.at
- 1999年7月28日 - 31日 岡山理科大学
第67回日本統計学会
- 1999年8月8日 - 12日 Baltimore, MD, USA
Joint Statistical Meetings (ASA, ENAR, IMS, and WNAR)
連絡先: e-mail: asa@mhs.compuserve.com
- 1999年8月11日 - 18日 Helsinki, Finland
52nd Session of the International Statistical Institute
連絡先: e-mail: isi@cs.vu.nl
- 1999年8月19日 - 23日 Tartu, Estonia
The 6th Tartu Conference on Multivariate Statistics, Satellite meeting to ISI Session

連絡先: FAX 37 27 465486

e-mail: etiit@ut.ee

- 1999年9月6日 - 24日 Trieste, Italy
School on Modern Statistical Methods in Medical Research
連絡先: e-mail: smrl122@ictp.trieste.it
もしくは sci_info@ictp.trieste.it
- 1999年9月13日 - 16日 Heidelberg, Germany
44th Annual Conference of the German Society of Medical Informatics, Biometry and Epidemiology (GMDS)
連絡先: FAX 49 6221 564195
e-mail: GMDS-ISCB99@dkfz-heidelberg.de
- 1999年9月14日 - 17日 Heidelberg, Germany
20th Annual Conference of the International Society of Clinical Biostatistics (ISCB)
連絡先: FAX 49 6221 564195
e-mail: GMDS-ISCB99@dkfz-heidelberg.de
- 1999年9月20日 - 22日 倉敷市
第27回日本行動計量学会

その他、掲載すべき関連学会・会議・セミナーなどございましたら、ニュースレター編集委員までお知らせ下さい。

ニュース・レター広告欄について

広告料はすべて途上国援助の目的に使うこととする。そのため、料金を低く設定し、1ページ3万円、1/2ページ2万円、1/4ページ1万円とする。

事務局からのお知らせ

銀行振込で会費を納入していただく場合、機関名が長いと会員名が切れてしまい、どなたからのお振り込みか、事務局では分からなくなることがあります。銀行振込の際には、必ず会員名を先頭にして下さい。

学会への連絡、問い合わせ等は手紙またはFAXで下記事務局までお願いします。また、所属、連絡先等に変更のあった会員の方は、事務局までご一報下さい。

編集後記

引き続き編集を担当することになりました。今まで同様、会員皆様のご協力をお願いいたします。協力をお願いする側（つまりニュース・レター編集委員）にとって、最も有りがたい協力とは何か。ずばり、記事の投稿です。年に4回のニュース・

レターですが、会員相互の情報交換の場にもなればと考えています。国際学会や関連会議の参加報告や案内、若手研究者・海外研究者の研究活動の様子など、会員にとって役に立つ情報、楽しい情報、耳よりな話を、ニュース・レター編集委員まで、電子メールでお送り下さい。お待ちしております。

（赤城山から）

日本計量生物学会事務局 〒106-8569 東京都港区南麻布4-6-7 統計数理研究所佐藤研究室内 FAX 03 (3446) 1695 栗原恵美子	編集委員会 林 邦彦，山岡和枝 〒371-8514 群馬県前橋市昭和町3-39-15 群馬大学医学部保健学科医療基礎学 林邦彦 FAX 027 (220) 8999 e-mail khayashi@news.sb.gunma-u.ac.jp
--	---